

令和5年度 国東市：全国学力・学習状況調査結果（中学校：英語）

1 結果のポイント

・全体結果

対象生徒数	平均正答率 (%)
国東市 (180 人)	38
大分県 (公立 8,634 人)	41
全国 (公立 893,528 人)	45.6

・分類別結果

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			国東市	大分県	全国
全体		17	38	41	45.6
学習指導要領の領域	(1) 聞くこと	6	49.3	53.3	58.4
	(2) 読むこと	6	44.3	47.5	51.2
	(3) 話すこと [やり取り]	4	6.9		14.5
	(4) 話すこと [発表]	1	3.1		4.2
	(5) 書くこと	5	15.9	19.1	23.4
評価の観点	知識・技能	9	42.3	46.3	51.5
	思考・判断・表現	8	32.4	35.5	38.8
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	12	46.8	50.4	54.8
	短答式	3	18.5	24.1	30.1
	記述式	2	11.9	11.7	13.5

- ・平均正答率での全国平均との比較では、7.6ポイント全国平均を下回った。
- ・領域別の全国平均との差は「聞くこと」で-9.1ポイント、「読むこと」で-6.9ポイント、「書くこと」で-7.5ポイントであった。

2 課題が見られた問題と指導の改善事項

1 情報を正確に聞き取る

設問 (2)

①趣旨

- ◆情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる。

道案内の場面における会話を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する問題である。目

的地までの道順を説明する英語を聞き、情報を聞き取ることができるかどうかを把握するために出題されている。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国
1	(2)	1 と解答しているもの ◎	49.4	64.9
		2 と解答しているもの	12.8	10.0
		3 と解答しているもの	21.1	12.7
		4 と解答しているもの	16.7	12.2
		上記以外の解答	0	0
		無解答	0	0.2

◆分析と課題

- 正答率は 49.4%である。目的地までの道順を説明する英語を聞き、情報を聞き取ることが身につけているとは言えない。
- 解答類型 2、3、4 に該当する生徒は、turn right や on your left という情報を聞き取ることができていないと考えられる。

設問 (3)

①趣旨

◆情報を正確に聞き取ることができるかどうかをみる。

買物の場面における会話を聞き、その内容を最も適切に表している絵を選択する問題である。店員と客の会話を聞き、情報を聞き取ることができるかどうかを把握するために出題されている。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国
1	(3)	1 と解答しているもの	2.8	3.2
		2 と解答しているもの	1.7	1.6
		3 と解答しているもの	57.2	44.5
		4 と解答しているもの ◎	38.3	50.5
		上記以外の解答	0	0
		無解答	0	0.2

◆分析と課題

- 正答率は 38.3%である。店員と客の会話から、情報を正確に聞き取ることには課題がある。解答類型 1 の反応率は 2.8%、解答類型 2 の反応率は 1.7%とそれぞれ低く、解答類型 3 の反応率は 57.2%と高いことから、the bigger one という情報を「より大きいもの」という意味で聞き取ってはできているが、some stars on it という弱形になる箇所や音の変化が起きる箇所を聞き取ることができていないと考えられる。
- また、解答類型 3 に該当する生徒は、代名詞 one の用法を十分に理解しておらず、the bigger one という情報を「より大きな星が 1 つあるバッグ」という誤った意味で聞き取っていることも考えられる。

③ (2) (3) の学習指導に当たって

学習者用デジタル教科書などを活用しながら、「聞くこと」の活動を繰り返し行い、情報を正確に聞き取ることができるようにする

情報を正確に聞き取るためには、音声や語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、聞くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。

特に聞く「技能」の指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- ・ 自然な速さで話される音声を聞いて、語と語の連結による音変化や強勢による英語特有のリズム、イントネーションに慣れる活動
- ・ 意味のまとまりを意識しながら区切って聞いたり音読したりする活動

これらの学習活動を一時的なものにせず、言語活動を行う際に、継続的に行っていくことが必要である。

情報を正確に聞き取るためには、抱えている課題が「知識」の側面なのか、それとも「技能」の側面なのかを把握し、個々の課題に応じた支援をしていくことも大切である。

例えば、音声の速度を調節し、ゆっくりと話された音声であれば聞き取ることができる場合には、「技能」の側面に課題があることが考えられる。こうした場合には、学習者用デジタル教科書などを活用して、音の変化に着目して特定の箇所を聞いたり、速度を落として何度も聞き直したりするように指導することが必要である。その際、個別最適な学びの観点から、生徒自身が聞く箇所や音声の速度を選択することなどが大切である。

一方、ゆっくりと話された音声であっても聞き取ることができない場合には、「知識」の側面に課題があることが考えられる。こうした場合には、話された内容における語彙や表現、文法などを理解するように指導することが求められる。

8 短い文章の要点を捉えて、考えとその理由を書く

設問 (1)

①趣旨

◆社会的な話題について、短い文章の要点を捉えて、それに対する自分の考えとその理由を書くことができるかどうかをみる。

ロボットについて書かれた英文を読み、書き手の最も伝えたい内容を選択する問題である。社会的な話題について、短い文章の要点を捉えることができるかどうかを把握するために出題されている。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国
1	(3)	1 と解答しているもの	14.4	10.7
		2 と解答しているもの	14.4	11.6
		3 と解答しているもの	30.0	20.4
		4 と解答しているもの ◎	40.0	56.6
		上記以外の解答	0	0

	無解答	1.1	0.8
--	-----	-----	-----

◆分析と課題

- 正答率は 40.0%である。社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることに課題がある。
- 解答類型 1、2、3に該当する生徒は、書き手の最も伝えたいことと、文章全体の話題や例示などとの関係性を把握することに課題があると考えられる。
- 平成 31 年度（令和元年度）【中学校】英語⁷（正答率 全国 33.5%：国東市 29.4%）において、複数の段落からなる「まとまりのある文章を読んで説明文の大切な部分を理解すること」に課題が見られた。

これに関連して、本設問では、「社会的な話題について、短い文章の要点を捉えることができるかどうか」をみる問題を出題したが、正答率は 国東市 40.0%であった。今回の結果から、複数の段落からなる文章の要点を捉えることに比べて、一つの段落からなる文章の要点を捉えることは比較的できていると考えられるものの、なお課題がある。

③学習指導に当たって

意見文を読んで、要点を捉えることができるようにする

意見文を読んで、要点を捉えるためには、文章全体を通して読み、複数の情報の中から書き手が最も伝えたいことは何かを判断して捉えることが重要である。

指導に当たっては、以下のような言語活動に取り組むことが考えられる。

- ・ 地球温暖化などの環境問題に関する説明文や意見文を読み、イラストや写真、図表なども参考にしながら、筆者の主張を数文でまとめる活動
- ・ 地球温暖化などの環境問題に関する説明文や意見文を読んで筆者の主張を捉えた後に、自分ができることなどについてペアやグループで尋ね合ったり伝え合ったり、さらにそれを簡潔に書いて表現したりする活動

言語活動を行うに当たっては、繰り返し用いられている語句や同じ内容を言い換えている表現、文章中の問いかけなどを手掛かりにして最も大切な語句や文を選んだり、段落内の文章の構成を把握したりすることが大切である。例えば、本設問であれば、As I explained という表現に着目し、後に位置する情報が筆者の最も伝えたい内容であると捉えることが考えられる。

なお、平成 31 年度（令和元年度）【中学校】英語⁷のように、複数の段落からなる文章を読んで、要点を捉えることも大切である。その際には、段落相互の関係を捉える指導などが考えられる。

9 文法事項や言語の働きなどを理解して正確に書く

設問 (1) ①

①趣旨

◆未来表現 (be going to) の肯定文を正確に書くことができるかどうかをみる。

正確に書くためには、音声や語彙、表現、文法や言語の働きなどを理解するとともに、これらの知識を、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けておくことが重要である。本問は、文構造や文法事項、言語の働きなどの知識を活用し、正しい語順で文を構成することや、伝えたいことについての情報を正確に書くことができるかどうかを把握することをねら

いとしている。

設問（１）は、与えられた英語を適切な形に変えたり、不足している語を補ったりして、会話が成り立つように英文を完成させる問題である。設問（１）①では、未来表現（be going to）の肯定文を正確に書くことができるかどうかを把握するために出題されている。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国	
9	(1) ①	1	未来表現（be going to）の肯定文を正確に書いているもの ◎（正答例）・am going to visit	6.7	19.3
		2	未来表現（be going to 以外）の肯定文を正確に書いているもの ○（正答例）・will visit	18.3	20.5
		3	未来表現の肯定文を書いているが、大文字・小文字の書き分け等に誤りがあるもの ○（正答例）・Am going to visit / Will visit	0.6	1.5
		4	未来表現の肯定文を書いているが、誤りがあるもの	1.1	1.8
		5	未来表現以外の肯定文を書いているもの	30.0	22.4
		6	類型5までとは異なる肯定文を書いているもの	31.1	26.8
		7	肯定文を書いていないもの	0.6	0.7
		99	上記以外の解答	1.7	0.6
		0	無解答	10.0	6.5

◆分析と課題

- 正答率は 25.6%である。未来表現（be going to）の肯定文を正確に書くことに課題がある。解答類型 5、6 の反応率が高いことから、特に、会話の流れを理解することや、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題が見られる。
- 解答類型 4 の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ will be visit
- ・ am going visit

このように解答した生徒は、会話の流れから時制を判断し、未来表現の肯定文を書くことは理解しているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題があると考えられる。

- 解答類型 5 の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ can visit
- ・ visited
- ・ visit

このように解答した生徒は、会話の流れから肯定文を書くことは理解しているが、時制を正しく判断して文を書くことに課題があると考えられる。

○ 解答類型6の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- am visit
- visiting
- going to

このように解答した生徒は、会話の流れから肯定文を書くことは理解しているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題がある、または問題の指示文を正しく理解できていないと考えられる

③学習指導に当たって

場面や状況から文の形式や時制を適切に判断し、正確に書くことができるようにする

場面や状況に応じて正確に英文を書くためには、文脈から適切な文の形式や時制を判断することが大切である。その上で、意味内容の伝達のみにとどまるのではなく、生徒自身が英語表現の誤りに気づき、修正を加えながら正確さを高めていくことが必要である。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- 文脈に応じて理解した文法事項を正しく活用したり、活用することを通して文法事項を理解したりする活動
- 書いた英文が相手に正しく伝わるかどうかについて、生徒自身が読み直して誤りを修正したり、ペアでチェックし合ったりして正確な英文に書き直す活動

関連のある文法事項をまとめて整理し、正確に書くことができるようにする

既習の文法事項を適切に使い分けられるようになるためには、関連のある文法事項をまとめて整理し、使い方の理解を深めることが大切である。その上で、再び意味のある文脈の中でより適切な表現を選択して活用することも大切である。例えば、大問9(1)①においては、会話の流れから未来表現を用いて書くことを理解した上で、会話をしている時点からみてこれから先のことを表す未来表現(will)よりも、すでに予定されていることを表す未来表現(be going to)を用いて書く方がより適切であると判断する必要がある。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- 既習の文法事項と新しく学んだ文法事項とを比較し、共通点や相違点を考える活動
- 意味のある文脈を設定し、適切な表現を選択して書く活動

学習活動を行うに当たっては、現在形や過去形を学習した後、時制として整理したり、to不定詞や関係代名詞などを修飾という側面から整理したりするなど、関連のある文法事項については、より大きく分類して整理して理解することが必要である。

設問(2)

①趣旨

- ◆ 「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことができるかどうかをみる。

設問(2)は、メールの英文を依頼する表現に書き換える問題である。コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて表現を使い分けるためには、そのための表現を理解しておく必要がある。ここでは、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことができるかどうかを把握するために出題した。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国	
9	(2)	1	「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書いているもの ◎ (正答例) ・ Can you come to the speech contest? ・ Could you come to the speech contest? ・ Will you come to the speech contest, please?	6.1	17.1
		2	「相手の行動を促す」という言語の働きを理解しているが、命令文を用いた表現となっているもの (please を文頭に用いているもの) ○ (正答例) ・ Please come to the speech contest.	8.3	9.1
		3	依頼する表現を書いているが、大文字・小文字の書き分け等に誤りがあるもの ○ (正答例) ・ can you come to the speech contest?	1.1	3.6
		4	依頼する表現を書いているが、誤りがあるもの	11.7	9.2
		5	類型4までとは異なる誤りがあるもの	46.1	36.5
		99	上記以外の解答	0.6	0.5
		0	無解答	26.1	24.0

◆分析と課題

○ 正答率は 15.6%である。「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を正確に書くことに課題がある。特に、解答類型5の反応率が高いことから、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解しておらず、依頼する表現が身に付いていないことが考えられる。

○ 解答類型4の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ Could you have to come to the speech contest?
- ・ Please you have to come to the speech contest.

このように解答した生徒は、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解し、依頼する表現を書いているが、基本的な語や文法事項等を理解して正確に文を書くことに課題があると考えられる。

○ 解答類型5の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ Have you come to the speech contest?

- ・ You want to come to the speech contest.

このように解答した生徒は、依頼する表現以外の疑問文になっているなど、「相手の行動を促す」という言語の働きを理解して依頼する表現を書くことができていないと考えられる。または、依頼する英文に書き直すという状況を理解できていないと考えられる。

○ 解答類型0に該当する生徒は、問題の趣旨を理解できていないか、基本的な語や文法事項等の知識が身に付いていないため、解答することができていないと考えられる。

③学習指導に当たって

言語の働きを理解し、場面や状況に応じて表現を使い分けられるようにする

言語の働きを理解し、場面や状況に応じて表現を使い分けられるためには、言語の使用場面やコミュニケーションを行う相手との関係性を意識し、場面や状況に応じた適切な表現を選択することが重要である。

指導に当たっては、以下のような学習活動に取り組むことが考えられる。

- ・ 教科書における登場人物の設定を変更し、適切な表現や言い方に直して音読する活動
- ・ 「親しい生徒同士」や「生徒と姉妹都市の市長」といった関係性の異なる相手を複数設定し、それぞれにおけるロールプレイを比較しながら表現を使い分ける活動
- ・ 既習の表現を同じ言語の働きごとに分類したり、同じ言語の働きをもつ表現同士を比較して相違点を考えたりする活動
- ・ 中学校国語科第2学年において「相手の行動を促す」という言葉の働きを扱っていることを踏まえ、国語科の指導と関連付けて言語の働きを理解し、英語における「相手の行動を促す」という言語の働きを類推する活動

学習活動を行うに当たっては、実際のコミュニケーションにおいて複数の表現を取り上げた上で、使用した表現を共有し、分類や比較を通して表現がもつ言語の働きを考えることが大切である。また、理解した言語の働きを別の文脈においても活用できるようにするために、異なる場面や状況を設定して、同じ言語の働きをもつ表現を使い分ける活動を繰り返し行うことが考えられる。

<話すこと>

1 即興で伝え合うとともに、考えとその理由を述べ合う

設問(3)

①趣旨

◆疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかをみる。

設問(3)は、動物園でのやり取りの中で、カンガルーが食べるものについて留学生に質問する問題である。疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用できる技能を身に付けているかどうかを把握するために出題されている。

②解答類型と反応率

問題番号	回答類型	◎は正解	国東市	全国	
1	(3)	1	カンガルーが食べるものについて正しく質問しているもの ◎ (正答例) ・ What food do they eat?	0.6	2.4
		2	カンガルーが食べるものについて質問しているが、コミュニケーションに支障をきたさない程度の誤りがあるもの ○ (正答例) ・ What food do kangaroo eat?	1.8	11.0
		3	カンガルーが食べるものについて質問しているが、コミュニケーションに支障をきたすような語や文法事項等の誤りがあるもの	22.1	24.5
		4	相手の発話を踏まえていない質問をしているもの	19.0	18.9
		5	類型4までとは異なる誤りがあるもの	8.6	12.3
		99	上記以外の解答	13.5	11.4
		0	無解答	34.4	19.4

◆分析と課題

○ 正答率は 2.4%である。疑問文の特徴を理解するとともに、その知識をやり取りの場面において活用することに課題がある。解答類型3の反応率が 22.1%と高いことから、大問9 (1) ②と同様に、疑問文の語順などの特徴についての理解が十分ではないことや、それを活用する技能が十分に身に付いていないことが考えられる。

○ 準正答（解答類型2）の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ What food do kangaroo eat?
- ・ What is kangaroo eating?

このように解答した生徒は、英語の表現に関して、冠詞の脱落、三人称単数現在形の誤りなど一部不正確な表現は見られるが、文構造の誤りはなく、聞き手に伝わる英語で質問している。

○ 解答類型3の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ What food kangaroo eat?
- ・ What they do eating?

このように解答した生徒は、カンガルーが食べるものについて質問しているが、助動詞（do または does）の脱落や語順の誤りが見られることから、疑問文の特徴を理解して、基本的な語や文法事項等を用いて質問することに課題があると考えられる。

○ 解答類型4の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ What is kangaroo?
- ・ What food do you eat?

このように解答した生徒は、相手の発話を踏まえずに質問をしていると考えられる。

○ 解答類型5の具体的な例としては、以下のようなものがある。

(例)

- ・ Kangaroo eat.
- ・ I have kangaroo.

このように解答した生徒は、相手からの質問を聞き取ることができていない、または疑問文の特徴を理解していないと考えられる。

○ 無回答率は34.4%と非常に高くなっている。イラストや説明から状況把握ができなかったことが原因と考えられる。また、状況把握まではできていたが、どのように尋ねればよいのかがわからず、発言できなかったことが原因と考えられる。

③学習指導に当たって

対話を継続・発展させるために、関連する質問をすることができるようにする

対話を継続・発展させるためには、相手に聞き返したり確かめたりすることや、相づちを打ったり、つなぎ言葉を用いたりすること、相手の答えを受けて、自分のことを伝えることだけでなく、相手の答えや自分のことについて伝えたことに関連する質問を付け加えることが重要である。

指導に当たっては、以下のような言語活動に取り組むことが考えられる。

- ・ 会話の流れに応じて関連する多様な質問を即座にする活動

言語活動を行うに当たっては、Yes-No 疑問文や or を含む選択疑問文、Wh-疑問文などについて、語順、動詞の形の変化、イントネーションなどを意識するよう指導者が声かけをすることが大切である。また、疑問文を実際のコミュニケーションにおいて正しく活用できるまでには時間を要するため、疑問文を用いて話したり書いたりすることを、3年間を通じて継続的に行うことも大切である。例えば、教師が用意した質問で言語活動を始めるのではなく、生徒自身が教師や外国語指導助手（ALT）に質問する場面や生徒同士で質問し合う場面を設定し、適宜正確さを高める指導を行うことが考えられる。